も右に記した樣に、たやすく旅行のできる事である。

さきに書いたプロペラ船といふのは、飛行機のプロペラを船にとりつけたので、新宮の人の發明である。その仕方は船尾に高く、水平の軸を設け、それにとりつけたプロペラは、空中にまはつて、空氣の抵抗によつて、船が進むので、熊野川にある船は長さ七間、三十人乘り位である。推進機が水中にないから、淺い川を上り下りする船に便利だ。新宮で始められたが、今は天龍川、富士川その他にも、用ひられ、支那の人も新宮へ來て見て、今は支那でも用ひて居るそうである。これを發明した人は、その財産をすつてしまつたそうである。

衢の地藏尊

中道等

一

新藥師寺の秋は、又となく閑朗なものであつた。美しく紅酣した紅葉の枝と、古い堂塔とが雲のない大空の下に、靜まりかへつてゐるばかりである。扉を閉じんとする若く痩せた僧の肩越しに、も一度小野篁作と云ふ地藏菩薩の顏を見直して、再び田の畦の細路を踏んだ。大極殿の址にはすぐに夕靄がほんのりと湧いて居る。わくら葉の寢返りする音さへ手にとるやうに聞える閑寂な夕べである。

その夜自分は宿の二階で、奈良とは遠く隔てた奥州の北

恐山の地藏祭りを夢に見たのである。外南部の古い說話を尋ねて、大昔の此の半島に太平洋の浪が打ち越し、內海の波が外海に這つて沫をあげたやうに、いつも仔細に渚のほとりを歩き廻つては、常に恐山の地藏に詣でるのが癖となつてしまつたのである。奥山の寺院では自分の來り詣でることが、前夜の枕邊に立つ地藏の御姿によつて知るやうになつたと、言はれる迄にあの菩薩とは顏馴染とはなつたのである。岩間の阿伽を結んではいろ〳〵な草花にそゝぎ、愛しい子や娘の名を、遠いあの世から呼び起す祭りの式を至つてはつきりと見てしまつたのであつた。

恐山の地藏尊、六尺二寸の金錫杖の影が、自分如き微賤の身にさへ及ぼし給ふことは、實に勿體ない話である。然しかゝる驗あることを無類であつたからこそ、荒ぶる夷の國の奥まで、備りない人の道は續いたのであつた。既に小野篁なぎもその昔六體の地藏尊を作つて、人に巡禮の道をいとも濃厚に曳いて置いたのである。卽ち篁が仁壽二年作るところの件の地藏を、初め木幡の大善寺に安置して在つたものを、保元二年平清盛、之を加茂御泥ケ池、山科伏見、鳥羽、桂、太泰の六所に分つて安んじ奉つたと、緣起を諸書には記された。所謂六齋太鼓、六齋念佛の信者たちが、知らず識らずに御衣の裾を迎ることが、延いては三十三番、四十八番札所の巡杖と逍遙とを地理の上に繰り返したのである。觀音と地藏の信仰が次第に濃くなつて地元の國の者のみならず、他生の人々まで土地を知り且、味得するようになつた。啻に五畿內五個國の古蹟名勝に富む土地のみばかりでなくもはや名をさへ知らぬ僻陬の國國にも、模してこの道順が設けられて居るのである。單に散米供錢の祈りを專らにするといふ風の外には、實に床しい道程の縮圖があつた。而も眼前に因果の外なる享樂があると知つては巡禮の旅は止められぬ。四國の若い衆が一年の暇を八十八ケ所廻りに費さんとし、一年も前から樂しみに御詠歌を練習して居ることなぎは決して無理のない話だと思ふ。

二

諸國に二十四地藏順禮札所の建立せられたのは、元祿年間であつた。卽ち寬永から元祿にかけて、完全に地藏の信仰が觀音の如き普通なる民間に習俗となつたことが分明するのである印度最古の女神たる此比哩底昆が、廣大なる地神の理想と化して、我等の最も親しき地藏となる迄には、遠くして且深い風俗の因緣が、大に絡まつてゐたのである。七月盂蘭盆の二十四日に、祭られる佛の風の裏には既に大昔から、かゝる因果を釀して遂には道の衢に立ち給ふべき數々の宿命があつた。そして其の實前にはこの運命を長べに記念すべき誦と念佛とが渦卷きになつたのであつた。

地藏信仰の特徵は、その有し給ふ多くの地藏數の苗字と言はれるものを見ても分るほど通俗なる世間の救濟にあつた。現前の濟度が常にその衣の袖や裾に、はた御足のあなうらに探り知られると感じては、悲しい涙を新たにし、更に一段の安慰を此のみ佛によつて貰はねばならなかつた。卽ち地藏十五經、延命地藏經の勸善懲惡を示し給ふ多くの說話から、果は唯に冥府の苦患を救ふのみならず、目前の苦しみをも和らげ、慰め吳れるものである。假令人の家の出產を見舞ひ又は堂に泊つた旅人をも保護する役目まで持たせられることゝなつた、地藏菩薩本願經の見聞利益品などは、悉く世間普通の辱さを語り、やがては道の傍らに立ち給ふべき宿命の一端を、あつさりと含ませて居るのであつた。

奧羽地方には未だに地藏車が道の傍らに建つて居る。卽ち地藏尊を供養するための六角若しくは四角の柱であつて中央の手の屆く便宜な個所をくりぬいて鐵製の車を嵌め、その上には大抵少さい笊を揭げてある。南無や大悲の地藏尊と唱へて、件の笊に小石を拾うては投げ入るゝのが普通であつた。もとより輪廻の苦患を、祈り詣づる人ばかりでなく、又產の輕くならんことを希ふ人の所作もあつたのである。卽刻の靈驗には祕法あつて、凡下の輩の知る限りではないと言ふも、而も理論の方法ではないのである。

笊に小石を拾ふことは、單に賽の河原の悲しい出來事を、現世から手傳つてやる慈悲心からとする決論には、少少ならず空虛があり、從つて滿足ではなかつた筈である彼のみ

ごり兒の所作として、河原の石をこりあつむ、一重組んでは父の爲め、二重組んでは母の爲め、晝はひとりで遊べども、日も入相のその頃は、こ地藏の和讃を咳くやうに唄ふ人々は、もはや涙を垂れてそして嘘唏するより外はなかつた。その上折角積み上げた小石の增加が、怖しい者共の爲めに無慘に頽されてしまふこ聞いて、大人の兩手に餘るほどの石を拾うて、笊に入れて助けてやらんこするは、當り前なる而して切々たる人情である。しかし人情に迷はされては眞の地藏の衢に立つ姿が明らかに映つては來ない、地藏の性は忍耐こ從順の外に、寬仁、止住、不動、出世、拙含乃至包藏なごの風俗があるこ言はれる、弘法大師の密敎弘傳に見える西部の曼陀羅にばかりは賴つて居られぬ。此御佛が日本に到り至つた以前の、國土の面影こ、同時に河原に立つた前後の事情こを解釋し得ねば大慈大悲の嚴然こして、而も柔和に我等の面前に落ち來つた態が明らかにはならぬ。玆に民間傳承の尊い歷史が輝いて來るのである。

三

地藏尊が路の衢に立ち、ちまたの神たる道祖神こいつしよになつた最初の動機は、正史には書いてない。道祖神は卽ち後に幸の神こして、大になくてはならぬ役目を持たせられた神であつた。この神こ同一視せられたのは恐らく偶然であつたらうこ、天野信景なごは說いて居るが、決して單なる偶然の出來事からではなかつた。たこへ時こして路傍の地藏が、陰陽の形を具へて、名までが起地藏、寢まり地藏こ言はれたからこても、其の立つ迄の根本的動機には、もつこ深い民間の信心がこゝに將來したものであるここを、考へ且悟らねばなるまい。河原の名の賽は、卽ち遮ぎるの差障りさへであつて、村端れの祭りの場から、邪神、惡神を、己が村里には入れじこする一つの祭りなのであつた。この河原の松の木を、皮を火に灯して夜泣きする子の面を照らせば、立ちごころに夜泣きの癖を直すなごゝ言はれて、小夜の中山以來、數々の味ある昔話を、街道筋

に殘したのである。況して土地誕生の高僧傳が、後年一大寺院を司る僧となり、一派の宗派を施す高僧となつた根元が、昔みごり兒を埋めた風習の、この村の河原から生れたといふからには、こゝに既に地藏尊の因緣を引出し得べき多くの要素が、豐かに溢れて居たのであつた。

道祖神といふ二神、並び立つ像を石に刻んで道に建て、之を金剛六地藏と同じ場所にあるものとしての考へは、山崎美成が海錄卷五にも明記して居る。而も二體並立の地藏も、四國三十四番中にも、大阪にも越後にも、又諸國にも往々見るのである。道樂地藏といふ香しからぬ名儀なども實は道德、卽ち道祖と同名で、その轉訛から情事の願立てにまで話が生れたのであらうとも言はれた。

中の地藏は何故背が低い、と謳はれるのを見れば、三體であることは疑ひない。しかし之は堂中に安置された尊の姿であつて、普通路傍に在るは、二體、多くは一體にして二體を兼ねたものであつた。畢竟、この御姿の研究には、更に一段と田の神の信仰、民族の道祖に對する信心の變遷

とを探求してからでないと、完全しない譯なのである。

地藏どのの苗字は、本山桂川君をして日本地藏辭典を編ましめんとしたほど、多く尙且つ複雜して居るのである。地藏がくさ〳〵の靈驗を示した名の外には、平民との約束を無下に履行せず、憎まれて鼻を抓られ、遂に曲つてしまつた地藏の名さへあつた。憎まれるやうではもはや既に世俗と平等の立場に居給ふのであつて、かほどに風俗ごもと親しい間柄とはなつたのである。而もその多くの名と、分布の世界とが、六地藏の所在などは餘所にして、道順の上に深山の人の足跡を印した、これが今日の世までに、經歷の杖を興味深く繫いで來た第一の功業であつて、斯くなればもはや弘法も慈悲も刀を執るところの一工道に過ぎず、篁の如き名作家も、凡人の世界に交通する思念と信仰から見れば、單なる傀儡と云ふより外はなかつた。生死の岐路に立つのみならず、長い歷史の交はる村端れの河原にも立つて、よく地下の理想を、上方の梵天より威力を顯はされた。この一點に南無や大悲の御地藏、行衞の闇を照らせ給へと稱名するのである。